

▲などを説明
(右から)

海外への伝え方探る 公開討論



「被災地から考える」をテーマに、広野町公民館と中央体育館で開かれている国際フォーラムの2日目は26日、本県の現状を海外に正しく伝える方策について外国人の視点から提言する公開討論などが行われた。

公開討論は「福島をいかに海外とつなぐか―情報発信者としての役割」と題し、マクマイケル・ウィリアム

福島国際交流センター副センター長（経済経営学類助教）と海外メディアを案内した「おもてなし福島通訳ガイドの会」の通訳案内士らが、本県を巡る海外の現状認識と風評払拭への

取り組みを語った。

マクマイケル氏は、インターネットで日本語以外の言語を使って福島の画像を検索すると、震災と原発事故直後の被災地や本県に無関係の災害現場の画像が大半を占めると指摘。海外で固定化された本県への「負のイメージ」を乗り越えるため「福島は『災害を期に苦しんでいる』から『災害を期に生まれ変わる』必要がある。新しい福島の創生を主張し、情報発信を続けることが大事だ」と訴えた。

最終日の27日は、カナダを訪問した広野中の生徒による報告会や伝統文化の継承を考える体験型講座などが開かれる。

本県を巡る海外の認識について説明するマクマイケル氏(右)